

サイキック・ディテクティブの登場

——英米小説のあるジャンルについて——

金 崎 茂 樹[†]

The “Psychic Detective” Character: Its Appearance in the British and American Novel

KANASAKI Shigeki

Psychic (occult or supernatural) detectives in fiction enjoy considerable popularity among the public readership. The first character of note is said to be “Dr. Martin Hesselius,” appearing in several stories published in 1872 by the Irish writer Sheridan Le Fanu, and the growth of the genre initially peaked between the late Victorian period and the 1930s. Academic study of the “Psychic Detective” novels, however, has been given much less attention than Gothic Literature or Horror fiction. This paper analyzes several characteristic aspects of this genre, through a discussion comparing it to Gothic novels, ghost stories, and the greater corpus of mainstream detective fiction.

キーワード：サイキック・ディテクティブ (psychic / occult / supernatural detectives),
ゴースト・ストーリー (ghost stories), ミステリ (detective fiction), フラ
クスマン・ロウ (Flaxman Low)

[†] 大阪産業大学 教養部 准教授

草 稿 提 出 日 10月27日

最 終 原 稿 提 出 日 12月13日

二一世紀も四半期を過ぎた現在でも小説・映画・アニメ・コミック・ゲームなどのエンターテインメントの世界においては、ミステリやファンタジー、ホラーは欠かすことのできないものとなっている。その勢いはとどまるところを知らないが、今まで以上に謎解きの要素が頻出しているのではないだろうか。それはなにも本格ミステリに限ったことではなく、例えば霊や妖怪の存在が当たり前の世界でも、謎めく事件があり、その因果が問われ、読者・視聴者・ゲーム参加者へ納得のいく謎の解明が加えられるのである。そうしたなか、ゴースト・バスターズや妖怪探偵、あるいは宇宙人相手のメン・イン・ブラックといったその道のエキスパートたちの淵源はどこにあるのだろうかという問いもあっていいだろう。本稿はヴィクトリア朝まで世紀を遡って、ホラー文学やゴシック文学研究が充実しているのと対照的にあまり顧みられることの少ない「サイキック・ディテクティブ」の諸相を探ってみたい。

本稿ではひとまずサイキック・ディテクティブの名で進めていくことにするが、人によってはオカルト・ディテクティブやスーパーナチュラル・ディテクティブと呼ぶ者もいる。いずれにしても、探偵^{ディテクティブ}といいながらも扱う対象は超常現象である。したがって彼らは第一にゴシック文学の系譜に属すべきであるが、同時に推理小説とも近接している。そもそもゴシック文学の正当な後継者であるエドガー・アラン・ポーが、推理小説の鼻祖の一人である探偵オーギュスト・デュパンの生みの親であることからいっても、この二つのジャンルは表裏の関係にあるといえるだろう。一方で幻想的な謎の展開、他方で謎の合理的な種明かしを骨子としながら、謎をめぐる物語という点は変わらない。

サイキック・ディテクティブの元祖は、アイルランド人作家のシェリダン・レ・ファニユの短編集『鏡のなかにほの暗く (*In a Glass Darkly*)』(1872)に登場するドイツ人医師マルチン・ヘッセリウス博士とする者が多い。博士の残した原稿の再話という体裁をとった五作品がおさめられるが、本作における博士の役割は「緑茶 (“Green Tea”)」「判事ハーボットル氏 (“Mr Justice Harbottle”)」「カーミラ (“Carmilla”)」「仇魔 (“The Familiar”)」などのそれぞれ独立した怪奇事件を緩やかに連関させる狂言回しに過ぎず、各話に濃淡の差があるものの、せいぜい観察者といったところで事件に積極的に関与して解決していくことはあまりない。そういう意味では探偵的ではないのだが、ここで重要なことは、これら奇譚が「およそ二百三十の症例」の一部であり、以下のように謎の原因説明や患者の治療可能性に言及していることである (Le Fanu 1993, p.41)。

ごく大ざっぱにいて、こうした同じ疾病は、すべて三つの区分に分けること

ができる。まずそれは、主観と客観という根本的な区分の上に立っている。超自然的現象を見ると主張するものの中には、ごく単純な幻覚症があり……。ほかに、外部から働く心霊力に冒されるものがある。また、一つの混成状態から病気になるものがある。（平井呈一訳「仇魔」『吸血鬼カーミラ』創元推理文庫 1970 pp.140-1）

超自然は妄想の産物か実在するのか、ツヴェタン・トドロフなら幻想文学の原動力（Todorov 1975, p.41）ともすべき古来からの問いかけに対してヘッセリウス博士は「心霊力（"spiritual agencies"）」の存在を認めている。本来ならその実在性に関していかがわしさがつきものだが、そこから救っているのは医学的言説をまとい「幻覚症」と並置させているからである。言い換えれば旧来の宗教色を排し距離をおいた客観的な分析の提示によって、科学として心霊力を扱うことが可能になる。心霊力の存在を認めるあたりは通常の推理小説と大きく異なるところだが、後続するサイキック・ディテクティブも事件を説明する際の疑似科学的な準拠枠を用意していることは頭に入れておいていい。

ここでヘッセリウス博士の後継者たちへと論を進めていくつもりであるが、その前に少し立ち止まっていくつかの文学ジャンルやモチーフとの比較を試みたい。互いの類似と差異によってサイキック・ディテクティブの特徴を浮き彫りにできればと望むからである。

ゴシック文学からゴースト・ストーリーへ

『オックスフォード版ヴィクトリア朝ゴースト・ストーリー』の編者であるマイケル・コックスとR・A・ギルバートによれば、当時のゴースト・ストーリーの特徴は「家庭的（"domestic"）」なところだという（Cox and Gilbert 1991, p.x）。確かに前時代のゴシック文学——ホレス・ウォルポールの『オトランド城』（1764）からチャールズ・マチュアリー『放浪者メルモス』（1820）あるいはジェイムズ・ホッグ『義とされし罪人の告白と回想（邦題は『悪の誘惑』）』（1824）までのおよそ六〇年間——は、出来事は中世などの大昔に設定され、場所も異国が多い（特にイタリアなどのカトリック圏）。また高貴な出自の人物も数多く登場し、その造形もマシュー・ルイス『修道士』（1796）やメアリ・シェリー『フランケンシュタイン』（1818）を一読すればわかるように、ヒロイックとっていいスケールの大きさが際立っていた。

それに対して一八六〇年代から活気を呈するゴースト・ストーリーの多くは、時代設定や舞台は読者に身近なものである。ここからどのようなことが導けるだろうか。一つはコックスらが指摘するように事実と虚構の境界が不明確となり（前掲書, p.x）、自己と無縁

の世界ではなく噂の圏内に霊が存在することで話の臨場感が増すということだろう。この点、ヘッセリウス博士ものは過去の事例の再話なので例外的といえるが、それでも実名を伏せるほどには近く（「緑茶」）（Le Fanu 前掲書, p.6）、登場人物も英雄的なところは見当たらない。

また「ゴシック」から「ゴースト」へとカテゴリーの名称が変化したことから推測できるように、恐怖の中心は人間のもたらすテラーやホラーというよりは霊へと移行している。実際の事件では古くは「ミセス・ヴィールの幽霊」（1706）——『ロビンソン・クルーソー』の作者ダニエル・デフォーによる実録——や「コック・レインの幽霊」騒動（1762）から（詳しくは東 2009, pp.129-32）、先行文学では亡父の霊に出会って復讐を誓う『ハムレット』のようなイギリスルネサンス期における復讐劇や、元城主の巨大な霊が登場する『オトランド城』など、過去に霊は皆無というわけではない。しかし一八六〇年からの定期刊行雑誌の大規模出版によって短編形式に拍車がかかり、この形式と相性の良いゴースト・ストーリーの量産となった点は見逃すことができない（Cox and Gilbert 前掲書, p. xv）。

長編か短編かに関して付言しておけば、ゴシック文学からの系譜を念頭に置き、当時の文化的不安——特に社会的ダーウィニズムや犯罪心理学が煽る退化恐怖——を読み取ろうとする多くの研究者が、後期ヴィクトリア朝で取り上げる恐怖小説——ストーカー『ドラキュラ』、ウェルズ『モロー博士の島』、ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』、リチャード・マーシュ『黄金虫』、アーサー・マッケン『パンの大神』などがあるが——これらはまずノヴェラか長編である。レスリー・マッカーシーは、超自然の物語のほとんどは短編であり上記の作品を特権的に扱うことに警鐘を鳴らしている（Leslie-McCarthy 2007, p. 25）。実際のところ、短編が存在形式になっているとまでいえそうなサイキック・ディテクティブの物語を学術分野で本格的に扱っている論考の数は極めて貧弱と言わざるをえないが、形式面におけるゴシック文学との差異は強調されてしかるべきかもしれない。また内容面でもゴシック小説が社会的不安の兆候を表現するというのなら、サイキック・ディテクティブはむしろ社会改善や解決を望んでいるとのレスリー・マッカーシーの持論は、これまでの研究風潮に反動的であるため過信は禁物にしても心に留めておいてよいだろう（前掲書, p.1-2）。

サイキック・ディテクティブとゴースト・ストーリー

ゴースト・ストーリーとの相互影響を考えると、^{スピリチュアリズム}心霊主義や神智学などの神秘思想の存在は欠かせない。「ヴィクトリア朝における霊への態度を一般化することは危険な作

業だが」と前置きしながらも、「知的立場とそれに相反する感情的反応が交錯する連結部と言っても差し支えなからう」と述べたのはスマジックであるが（Smajić 2010, p.54）、この時代は、知的には霊の存在を科学的に証明あるいは否定し、感情的には時に好奇心も交えながら霊との交流を熱望するといった両側面を巻き込んでいる。それは単なる信仰ではない。後期ヴィクトリア朝は、「霊は存在するかもしれない」との認識が今まで以上に世間に浸透していたのであり、また科学がこれほど心霊について真剣に考えた時代は他になかった。当時の最先端の科学、例えば光学における光の波動説、熱力学第二法則、数学における非ユークリッド幾何学、不可視の世界を対象にする量子論——などを世俗的に解釈（それゆえに曲解となる）しながら、エーテル説による世界観、あるいは四次元への関心なども心霊主義は取り込んでいったという（前掲書、pp.137-48, 163-8）。そこに写真術や目に見えない対象の細菌研究も加えていっだろう（Parlati 2011, p.215）。「スピリチュアリズムとは、単に幽霊の存在を信じるだけの思想ではなく、霊魂の世界と科学や合理主義とを統合するニュー・サイエンスだったのである」（千街 2002, p.231）。サイキック・ディテクティブとはこのような時代の申し子であった。ともかくゴシック小説の場合のように悪の存在が人間に限定されたり、霊が登場するにしても端役にすぎないのであれば、サイキック・ディテクティブの出る幕はない。

かくしてサイキック・ディテクティブは出るべくして出たといえる。しかし霊の存在を当然とする点で今までのゴースト・ストーリーとも異なっていた。そもそも霊とは存在論的に不安定であり、ヴィクトリア朝のゴースト・ストーリーの顕著な特徴は、ゴーストは本物か、目撃者の眼を疑うべきなのかの決定不可能性を糧にしてきた。どちらかというところヘッセリウスの物語が探偵小説的であるのは、「謎はリアリティではなく因果関係（“causality”）が問題となっている」（Smajić 前掲書、pp.154-5）からである。

典型的なゴースト・ストーリーにおいては、霊の存在論的不安と体験者の精神的不安が軌を一にするのに対して、サイキック・ディテクティブはそうした不安を納得のいく謎の解明によって取り除くのが仕事である。たとえ怪事件の張本人が霊であったとしても、そこには恐怖の減殺が伴い、恐怖の持続をうたう純粋なホラー小説とは一線を画すべき扱いがされる。ラヴクラフトのサイキック・ディテクティブものへの不満もそのあたりにある（Lovecraft 2000, p.79, 89）。

また、先述の神秘思想の興隆が加わることで、新たな幽霊屋敷の物語も一八八〇年代に登場することになった。レスリー・マッカーシーによれば、謎の解決や霊との対立より融和関係に比重がおかれ、結果として物語は不安ではなく問題解決的なムードを帯びるものも現れた（Leslie-McCarthy 前掲書、pp.58-9）。例えば同論文が引くマーガレット・オリ

ファント (Margaret Oliphant) 「開いた扉 (“The Open Door”) (邦題は「廃屋の靈魂」)」(1881) では、科学的アプローチもさることながら重要なのは、霊は研究対象のみならず人間であったことを強調している点が従来のゴシック小説と袂を別つところでもある (前掲書, p.59, 64)。確かにこの物語に登場するさまよえる霊は共感を抱かれながら天へと導かれていく結末となっている。とはいうものの、サイキック・ディテクティブの相手は友好的な霊もなくはないが、対決構図を強調するため邪なタイプが多いといえよう。

サイキック・ディテクティブとミステリ

サイキック・ディテクティブにはさまざまな文学的アーキタイプとの親近性が存在している。余人にはあずかり知らぬオカルト知識の持ち主としてはロマンス文学の白魔術師、執拗なまでの真相解明の追求者なら白魔術師の反転像であるマッド・サイエンティスト——ミステリ界での数多くのエキセントリックな探偵たちもこれと無縁ではない——などが挙げられるだろう。

探偵という共通項から当然のこと、探偵を主人公とするミステリと類似点があることにはいまさら贅言を要しないかもしれない。だがゴースト・ストーリーと同じくミステリもまたその祖をゴシック小説とする説は今一度踏まえておいてもいいかもしれない。マイケル・クックによれば、遠方の謎多き城はミステリではカントリーハウスに居を移し、秘密の通路や囚われの犠牲者は密室ミステリのアイデアへと引き継がれていく。加えて、脅される女性相続人、紛糾する相続問題、あらゆる類の犯罪などはゴシック小説のクリシェとも言うべきものといってよい。「超自然の視点から探偵小説を読むこと」に意義を感じ、「ゴースト・ストーリーは探偵小説のアンチテーゼとして標榜されるだけでなく、實際上、探偵小説そのものの礎であった」(Cook 2014, p.2) とミステリ側の研究者のクックは言う。事実、ゴシック小説には超自然の正体は人為的に作り出されたものとする作品も数多い。その代表格はアン・ラドクリフの『ユードルフォの謎』(1794) で、謎解きを主眼としているわけではないがミステリの萌芽は認められるものである。

一方でミステリが捨象するのは、『ユードルフォの謎』の向こうを張る意気込みで書きあげたルイスの『修道士』などであからさまに出現する悪魔や霊などの超自然である。ところがミステリにとっても、凡庸な事件よりも怪事件に探偵の謎解きの冴えが発揮されるため怪奇性・異常性に包まれた超自然的な設定は今でも人気が高い。結果的にはミステリの探偵はそのような超自然は偽装されたものと切り捨て、サイキック・ディテクティブは受容する。言わずもがなの差ではあるが、この差異からうかがえるのは、相互に内包関係にあり、結末が始まりとなる円環構造を成しているということである。ここで円環構造と

サイキック・ディテクティブの登場（金崎茂樹）

呼んでいるのは、例えばサイキック・ディテクティブが導く霊の存在という結末は、ミステリーの探偵にとっては怪事件と映り事件の始まりを意味するかもしれないし、逆にミステリーの探偵が下す結末の中で割り切れない残余があればサイキック・ディテクティブの登場を俟たねばならないかもしれない、というものである。

ストーリーの展開に関してもう少し補足しておく、サイキック・ディテクティブでは探偵以外は当初、事件を人為的だと疑うが最終的に超自然の関与を認めての結末となる。その点はミステリーと対照／対称関係にあるが、それとともにサイキック・ディテクティブの扱う事件の真相を知る者は、（読者を除いて）探偵と当事者のごく一部のみという場合が多い。その仕事は警察組織や司法などのいわゆる国家権力が公式に認可できない事件を扱い、また人間ではないものを相手にするため、時に法の下での正義という基準から逸脱する場合がある。例えば『ドラキュラ』でのヴァン・ヘルシング率いるチームは不死者を司法に突き出すようなことはしない。むしろドラキュラを追跡する際に違法行為を犯しているし、その退治方法はドラキュラが獲物を相手にするよりもはるかに残虐である（金崎 2008, pp.102-3, 106）。

サイキック・ディテクティブたち

先に通説ではサイキック・ディテクティブの元祖がヘッセリウス博士だと紹介したが、さらに遡ってマーク・レモンの短編「幽霊探偵（“The Ghost Detective”）」（1866）とする者もある（森 1999, p.62）——しかしながら、これはむしろ「幽霊が探偵」として真相を暴く物語である（Lemon 2015, pp.80-2）。また初期のオカルト探偵物語を網羅的に扱い年代順に整理している貴重なウェブサイト「メリー・ゴースト・ハンター（The Merry Ghost Hunter）」（<https://merryghosthunter.wordpress.com/>）によれば、マーク・レモンへの言及はないが（2016年10月現在）、さらに五〇年ほど早くのE・T・A・ホフマン「廃屋（“Das öde Haus”）」（1817）のK博士、英語圏では1840年のヘンリー・ウィリアム・ハーバート「幽霊屋敷（“The Haunted Homestead”）」に登場するダーク・エリクソンという人物を先頭に配している。

本家の追求はこのあたりにしておくと、ヘッセリウス博士以降で愛好家に知られている初期のプロの探偵たちなら、E & H・ヘロン（E. and H. Heron）のフラクスマン・ロウ（1898）、アルジャーノン・ブラックウッドのジョン・サイレンス博士（1908）、ウィリアム・ホープ・ホジソンのトマス・カーナッキ（1910）が三巨頭といってよい。これら三名の探偵は、一般的知名度からすると同時代の『ドラキュラ』のヴァン・ヘルシングには及ばないものの、複数の短編に登場するシリーズものの主人公の先駆者であり、同時代のシャーロック・ホ

ームズのライバルたちとも称される。

その他、サックス・ローマーのモリス・クロウ（1913）、アリス&クロード・アスキーのエイルマー・ヴァンス（1914）、シーバリー・クインのジュール・ド・グランダン（1925）もまとまった翻訳で親しむことができる。また著者自身がオカルティストであるアレスター・クローリーのサイモン・イフ（1917）やダイアン・フォーチュンのジョン・タヴァナー博士（1922）、それ以外にもローズ・チャンピオン・ド・クレスピニーのノートン・ヴァイス（1919）など枚挙にいとまがないが、なかには探偵側に千里眼や再現夢などのいわゆるオカルト能力があるだけで超自然の登場しない物語もあるのでいささか混迷の様相を呈している。

これらすべてを整理・分析するには紙幅に限界があるので、以下では代表作としてフラクスマン・ロウの物語を取り上げることとし、これまでにおさえてきた点の再確認と、さらに必要なら再検証を行って本稿を締めくくりたいと思う。フラクスマン・ロウを選ぶ理由は、最初のシリーズ物のサイキック・ディテクティブでありこのジャンルのいわばテンプレートともなりえるからである。また「三巨頭」の残りの生みの親であるブラックウッドとホジソンは怪奇小説も数多く手がけているため作家論・作品論もそれなりの質量があり、またサイレンス博士とカーナッキが登場する作品は全て翻訳されているのに比して、フラクスマン・ロウは管見では三編のみ翻訳が別々のアンソロジーに収録されているだけで、作者 E & H・ヘロンともどもこれまで不当に見過ごされてきた感が否めないからである。

E & H・ヘロン『フラクスマン・ロウの経験』（1898）

作者の E & H・ヘロンは変名で本名はケイトとヘスキスのプリチャード母子の合作である。フラクスマン・ロウのシリーズは『ピアソン・マガジン』誌に二年にわたって十二編が掲載された。シリーズ化の特徴としては、基本的には各話が成功譚であること、登場人物の深化が描けることなどが挙げられる。全ては最後の短編の雑誌掲載と同年に一冊にまとめられ、序文には以下のような記載がある（Heron 2011, p.9）。

果たして霊は我々の空想や感情の外部に実在するものであろうか。オカルト現象に関する莫大な数の証言があるにもかかわらず、最終的な答えがまだ提出されていないゆえに、この問題は世紀末にますます関心を呼ぶことになっている。これと関連して心理学を厳密な科学分野へと練磨していく第一歩として、精霊や幽霊の分類を試みたが結果は奇妙で恐ろしい理論——選ばれし数名を除けば

夢にも思いつかないもの——がいくつか現れたことは一般的に知られていないだろう。

このような事案への広範囲にわたる関心を満たすために、以下に一連の幽霊物語を一般の方々へ開陳しよう。それらはフラクスマン・ロウ氏が多少なりとも関わってきたあまたの超自然的体験より集められたものである。その見えすいた仮名を取れば氏が現代の科学の牽引者の一人だと大方はお認めになるに違いないし、心理学とその周辺テーマに関する氏の業績はご存知のはずである。氏は古き因習に染まった手法を敢然と断ち切り、いわゆる超自然的な問題を自然法則の分野で解明しようとする大胆さと独創性を兼ね備えたその道の最初の学徒でもある。（拙訳）

ヘッセリウス博士の時と同様にシリーズ物をまとめるために追加された文章のようだが、どの程度かにわかに定めがたいとはいえ、超自然が実在するか否かを「自然法則の分野で解明」することに当時の関心の所在があったことが理解できる。ロウはその道の専門家であり、巻き込まれ型のアマチュア探偵とは事件の取り組み方も違う。レスリー・マッカーシーはその差を以下のようにまとめている。超自然的問題を解決する際に科学とオカルトの両方の知識を動員すること、状況をコントロールできること、超自然を未知のものから、正しく取り組みさえすれば理解可能で処理できる現象へと変貌させたこと、つまるところ超自然を脱神秘化させ、それに伴う恐怖や不安を取り除き、代わりに新たな観念への興奮や可能性を生み出したこと、また超自然は研究対象に過ぎないこと、「正規の」記録係であるワトソン役がいることなどである（Leslie-McCarthy 前掲書、pp.157-61）。見方を変えれば、世紀の変わり目の「新たな」サイキック・ディテクティブに必要なものは、霊媒的な才能ではなく、規律・献身・実践・管理といった中流階級の専門職に要する資質である（前掲書、p.156）。このことと関連するが、同時代の「通常の」探偵であるシャーロック・ホームズはエキセントリックでデカダンな面を持ち合わせているのに対して、ロウ、サイレンス博士、カーナッキはそのようなところは見当たらない。そのぶん人間臭さがなく面白みに欠けるともいえるが、あくまで常識の範囲内での事件解決を求められるホームズと違い、後者のように超常的な世界観を周囲に納得させるには人物として常識的でなければならぬからであろうか。

事件の謎解きも通常の探偵小説と違う。具体的に数編をみてみると、例えば「灰色の館事件（“The Story of the Grey House”）」では、過去に首吊り自殺が多発した館を調べたロウは、実は屋敷に持ち込んだ異国のつる状の植物に殺されたと結論づける。植物に意思

や悪意はあるのかという問いかけに、ピタゴラスやバラモン教、アフリカの部族の信仰を引き合いにして「地縛霊は天折や突然死の瞬間にある種の植物や樹木に乗り移ることもある」(81)と答える。

また別の物語「サドラーズ・クロフト邸事件 (“The Story of Saddler’s Croft”）」において、夢遊病の妻が月夜にギリシア人と聖堂に入るのをアメリカ人の夫が目撃し、その後を追って中に入ろうとすると周囲から歌声が聞こえて朝まで気を失ってしまう。妻と共にいた人物はシンクレアというセイロンから帰国した英国人が怪しいと夫は踏むが、顔つきはまるで違っていた。調査に乗り出したロウは、それほど遠くない昔にこの地で月の女神ダイアナを崇拝していたギリシア人の霊がシンクレアに憑依していたと説明する。容貌が異なることに関してロウは、ギリシア人は「尋常でない意志の持ち主にちがいない。シンクレアの魂を実際に支配したのだから。それゆえシンクレアの精神的属性のみならず肉体的な外観も奴に似るようになったのです」(124)と説明する。

また「ムア・ロード事件 (“The Story of the Moor Road”）」では、黄昏時に採石場を通りかかった人物が、顔は見えないが「立ち上がった耳の奇妙な毛皮帽をかぶった」「子どもほどの大きさしかない顔をした」(42)背の高い痩せっぽちの男を見かける。見失ってしまうが付近には足跡もない。その帰り道に突然、鉄製の穴抜き器のような尖ったもので背中をつかまれる。それでも犯人の咳が聞こえる中、命からがら逃げおおせたのだが、結局それは、地震がきっかけで縛を解かれた「地精」が結核を患っていた近在の者の精気を吸って実体化したとロウはいう。

ついでに最終話「フラクスマン・ロウの物語 (“The Story of Flaxman Low”）」も紹介しておく、その直前の物語にも登場したカルマーケイン博士との戦いを描く活劇調の話となっている。「人の最終目的は個人の力を獲得すること」(172)と嘯く博士からの協力の申し出を断ったロウは、しばらくして集中力の欠如に悩まされることになる。「精神的インキュバス」(174)に責められているようで、自分のものとは異なる外からの思考が侵入し、監視されている感覚を持つ。レ・ファニユの「緑茶」を彷彿とさせる展開だが、「実体を持たない霊を操る力を得た」(182)カルマーケインの仕業と判明する。最後は二人の決闘となりロウは手傷を負いながらも博士の息の根をとめる。

以上のように謎とその理由だけを示すと荒唐無稽に映るが、実際はロウのみならずどのサイキック・ディテクティブも知識・観察・演繹に基づく解釈行為を経て結論に達しているのである。例えば「コナー古荘事件 (“The Story of Konnor Old House”）」の「光る人間」の正体は新種の毒性発光菌類であり、「カーマ・クレセント一番館事件 (“The Story of No.1 Karma Crescent”）」での幽霊の目撃と変死事件は中国人ギャングによる計画殺人で

あるとロウは看破した。超自然の事件とそうではない事件を見極めることができるのは「通常の」探偵業務によってである（カーナツキの場合は超自然かどうかの見極めがもっと難しくなっている）。彼らは単なるオカルトを信奉する除霊師ではない。レスリー・マッカーシーの指摘にあるように、オカルト主義は専門職ではない。専門家とみなされるには探偵たちが自らを科学者と位置付けなければならないのである（前掲書、p.160）。

サイキック・ディテクティブの世界観

それ以上に問題となるのは、ロウ（とサイレンス博士やカーナツキも）が超自然世界の全貌を知悉しているわけではないところにある。「多くは未だに不明であるが……」（53）といった発言や、霊が生前の住居に戻ってくることが多い「理由はまだ説明できない」との回答（95）、人を殺害する植物の存在について「信じてくれとは言わない……ただそのような信仰は存在すると言っているだけです」（82）と述懐するなど、超自然の世界に対して自身の知識や能力を過信せず謙虚に接する姿勢は、幽霊の正体を暴こうと蛮勇をふるいミイラ取りがミイラになる典型的なホラーパターンから探偵たちを救っている。しかしながらこのような未知の要素がふんだんに散りばめられた物語は、「通常の」探偵小説と根源的に異なる世界観を提示することになっている。どういうことか。

同時代における「通常の」ミステリの世界では基本的に謎は全て解明されるのが前提である。突き詰めればそれは、ミステリ作法として有名なノックスの十戒やヴァン・ダインの二十則に代表される、読者への裏切りを許さないフェアプレイの精神に貫かれた明るい世界であるといっている。一方、サラ・クロフトンの論を参考にすれば、オカルト探偵にとって事件は時に説明がつかないと結論があっても、それは失敗を意味しないし、極端に言えば、不確実性は正当な反応で時に正しい解決となる。サイキック・ディテクティブは周囲よりも隠れた法則に詳しいとはいえ、「テキスト世界内で無知の知（informed ignorance）という特別な位置にいる」。このような状況では過去の事件のアーカイブも参考程度にならざるをえないため、探偵は次の事件は解決できないかもしれないリスクを常に背負う。「自身の解釈行為と客観的に真となる事実との絶対的一致の否定」が見られるのであり、「このジャンルの最も際立った特性の一つ」は「オカルト探偵がどのような事件も本物の超自然的事件であると判定することができないこと」とする（Crofton 2012, p. 31-4）。以上をかいつまめば、通常の探偵の世界はいわば閉鎖系であり、サイキック・ディテクティブの生きる世界は開放系なのだといってよい。これまでミステリとの比較をみてきたが、この知の^{エビステマー}枠組の差は両者の最大の違いといえるだろう。サイキック・ディテクティブの世界は、通常の「探偵のとり方法論やレトリックを模倣しながら最後には伝統的

な探偵物語が依存している知の確実性を穿つ」(前掲書, p.39), そんな可能性を秘めているのである。

以上, サイキック・ディテクティブに関するいくつかの点の考察を試みてきた。本来なら, ロウ, サイレンス博士, カーナッキのテキスト細部にさらに分け入って, 作品のなかに投影された当時の文化や精神を検討するべきであるが, それは次稿に期したいと思う。

引用文献

- Ascari, Maurizio (2007). *A Counter-History of Crime Fiction: Supernatural, Gothic, Sensational*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.
- Cook, Michael (2014). *Detective Fiction and the Ghost Story: the Haunted Text*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.
- Cox, Michael and Gilbert, R. A. (1991). "Introduction." *The Oxford Book of Victorian Ghost Stories*. Oxford and New York: Oxford UP, pp.ix-xx.
- Crofton, Sarah (2012). "CSΨ: Occult Detectives of the Fin de Siècle and the Interpretation of Evidence." *Clues: a Journal of Detection* vol. 30 no. 2 (Fall 2012), pp.29-39.
- Heron, E. and H. (aka of Pritchard, Kate and Hesketh) (2011). "The Experiences of Flaxman Low." *Supernatural Detectives 3: Flaxman Low / Lord Syfret*. Landsville, Pennsylvania: Coachwhip Publication, pp.9-184.
- Le Fanu, Sheridan (1993). *In a Glass Darkly*. Ed. Robert Tracy. Oxford and New York: Oxford UP.
- Lemon, Mark (2015). "The Ghost Detective." *The First Leonaur Book of Supernatural Detectives*. Ed. Morgan Tyler. Milton Keynes: Leonaur, pp.80-2.
- Leslie-McCarthy, Sage (2007). *The Case of the Psychic Detective: Progress, Professionalisation and the Occult in Psychic Detective Fiction from 1880s to the 1920s*. Diss. Griffith U. (Submitted in fulfillment of the requirements of the degree of Doctor of Philosophy. September 2007).
<https://www120.secure.griffith.edu.au/rch/file/254c5cff-cf19-1b4f-b252-89fae9e69b34/1/02Whole.pdf>
- Lovecraft, H. P. (2000). *The Annotated Supernatural Horror in Literature*, Ed. S. T. Joshi. New York: Hippocampus Press.
- Parlati, Marilena (2011). "Ghostly Traces, Occult Clues: Tales of detection of Victorian

and Edwardian Fiction.” *European Journal of English Studies* vol. 15 no. 3
(December 2011), pp.211-220.

Smajić, Srdjan (2010). *Ghost-Seers, Detective, and Spiritualists: Theory of Vision in Victorian Literature and Science*. Cambridge: Cambridge UP.

Todorov, Tzvetan (1975). *The Fantastic: A Structural Approach to a Literary Genre*. Trans. Richard Howard. Ithaca and New York: Cornell UP.

東雅夫 (2009) 『怪談文芸ハンドブック 愉しく読む, 書く, 蒐める』メディアファクトリー

金崎茂樹 (2008) 「ドラキュラにおける敵対構図」『甲子園大学紀要』第 36 号 pp.99-106.

千街晶之 (2002) 「評論 論理の悪夢を視る者たち」『怪奇幻想ミステリ 150 選』原書房 pp.225-261.

森英俊 (1999) 「ホラー・ミステリの一世紀半 ジョン・ディクスン・カーから B 級本格まで」『幻想文学』第 55 号 アトリエ OCTA pp.62-67.

The Merry Ghost Hunter: Regarding the Legacy of Occult Detective and Ghost Hunter Fiction (<https://merryghosthunter.wordpress.com/>)